２０２４年０９月２６日 読売東京 朝刊 都民２ １３Ｓ版 ２６頁

モデル・睦子の存在

文人の武蔵野

大岡昇平 ⑱

大岡昇平の「武蔵野夫人」の道子には、坂本睦子というモデルがいました。１９５８年４月、睦子は自殺します。作中の道子と同じ道行きを辿ったことを知った時、大岡は雑誌に連載中の「作家の日記」の中で、睦子の「俤を一番かりている」と記し、遺書の内容にも触れました。

随筆家の白洲正子。自著「いまなぜ青山二郎なのか」で大岡と坂本睦子との関係についても記した

そのような大岡の筆に対して白洲正子は、「モデルが現実の人間に似ている必要はない」が、睦子を知る人々は「みな不満に感じていた」と証言しています。睦子は「魔性」という言葉で呼びたくなるほどの魅力を備えていた人なのに、作中では「ただの平凡な女にひきずりおろされ、人生に疲れはてて自殺する」なんて「浮ばれまいと、誰しもそう思うのであった」と指弾しています。

なぜそこまで非難されたのでしょうか。色々な理由が考えられますが、一つには、文壇的事実として睦子は大岡が長い間一緒に暮らしたことのある女性であり、本気で惚れていたはずだったからでしょう。大岡が睦子をモデルにしたのは「武蔵野夫人」だけではありませんでした。「花影」や「再会」のような小説でも大岡としては睦子を描いたつもりでした。

睦子と大岡は、単に一対の男女だったということではありませんでした。白洲正子によれば、若い文士が先輩文士に惚れて、先輩の惚れた女を腕によりをかけて盗むという状況の渦中にいた。「広い文壇の中で、尊敬されている先生から、尊敬している弟子へと、いわば盥廻しにされた」。そのような女性である「坂本睦子をヌキにして、彼らの思想は語れない」という結論に至ります。菊池寛、小林秀雄、中原中也、坂口安吾といった昭和文学史を彩る武蔵野の文人たちも例外ではありませんでした。

「武蔵野夫人」には、そこまで魅力的な男性も女性も登場しません。「姦通」概念を消し去るほど凄みのある「姦通」も描かれていません。とするならば、大岡もまた国木田独歩と同様に、武蔵野での体験に基づいて小説を書きながらも作品に現実を投影したわけではない、ということになりそうです。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはＱＲコードから。